

平成 19 年 8 月 12 日

財団法人 庭野平和財団

理事長 庭野欽次郎様

事務局 御中

映像教育学研究会

千葉 茂樹

拝啓

時下、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

常日頃から、大変ご厚情を頂きながら失礼を重ねており、誠に心苦しいかぎりです。

この度、貴財団の助成事業を頂いた案件がようやく最終報告ができるまでに漕ぎ着けましたので、ここに慎んで所定の資料を添えて報告とさせて頂きます。今まで大幅の遅れについて、深くお詫びを申しあげるとともに当初からのお力添えに対し厚く感謝を申し上げます。

今後とも、懲りずにご指導とお力添えをよろしくお願い致します。

記

コード番号：04-A-234（平成 16 年度）

助成対象：平和をめざす映像教育のとりくみ

助成金額：¥500, 000

### 【報告資料】

1) 平成 16 年度会計報告書（様式 9）

2) 平成 16 年度最終報告書

\* 最終報告書（映像作品 DVD 及び小冊子・ガイドライン）

\* 中間報告と計画変更のお願い（平成 17 年 12 月 20 日）

\* 最終報告の延期についてのお願い（平成 18 年 8 月 5 日）

3) 研究／活動掲載紙又はその写し（添付資料）

敬具

## 最終報告書（1）

平成 16 年度の助成対象に選ばれました【04-A-234】について、当初の計画が大幅に遅れましたが今回平成 19 年 8 月に最終報告が出来ますことを心から感謝申し上げます。

助成対象：【平和をめざす映像のとりくみ】は、次のような製作過程を続けてきました。

- 1) 平成 16 年 9 月、オーストラリア現地調査を 10 日間実施する。  
取材対象者ジョン・ミル教授との交渉開始。
- 2) 同年 10 月 14 日、庭野平和財団より助成決定の知らせが届く。
- 3) 平成 17 年 3 月末、現地スタッフの決定と準備取材（2 週間）  
2005 年度 NSW 洲【シネリテラシー実施プラン】の検討。
- 4) 同年 6 月末、第一次取材（教師対象の研修会その 1 など・取材協力校をリサーチ）
- 5) 同年 7 月末、第二次取材（教師対象の研修会その 2・映画授業の実施 3 校に協力依頼及び取材）
- 6) 同年 9 月中旬、第三次取材（教育現場 3 校）の取材を本格開始。
- 7) 同年 10 月中旬、第四次取材（教育現場 3 校）の取材を続行。  
仮編集のための編集機器を調達し、仕上げの準備開始。
- 8) 同年 11 月末、第五次取材（教育現場 3 校の仕上げ作業）並びに【子ども映画祭】（12 月 5、6 日）と関係者への最終取材。

### その後の計画変更

当初の計画では、以上のオーストラリア取材が終了したあと約半年以内に作品完成する予定であった。しかし、取材テープが予想以上に膨大な数量となった結果、その翻訳及び編集作業に当初の計画をはるかに超えた時間と労力が必要となった。

- 9) 平成 17 年 12 月 20 日付で、庭野平和財団に宛て「中間報告書と計画変更のお願い」を提出。
- 10) 平成 18 年度は、2 月以降に翻訳及び編集専門のスタッフを準

備して、仕上げ段階に取り組む。

その課程で、当初の製作費が不足することが予想されたので庭野平和財団に加えて以下の助成団体からも支援を仰ぐ事にした。この点、ご了承を頂きたい。

\* サントリー文化財団 (100万円)

\* 映画「愛の鉄道」制作委員会 (100万円)

\* 童夢映画プロジェクト (100万円)

なお、この段階で【映像教育学研究会】は資金面で限界に至った結果、【市民グループ地球家族の会】との共同制作という方式をとる事で作品を完成させる道を選ぶことにした。

この点でも、勝手ながらご承諾頂きたい。

- 11) 平成18年8月5日庭野平和財団宛に「最終報告の延期についてのお願い」を提出。
- 12) 平成18年10月、仕上げ作業を完了。  
社会教育映画『シネリテラシー 映画をつくる子どもたち＝オーストラリアの挑戦＝』(60分)  
特典映像 1) 関係者のインタビュー  
2) 子どもたちの作品集4本
- 13) 平成18年11月14日  
オーストラリア大使館において、【豪日交流年・特別記念上映会】を実施。
- 14) 平成19年5月26日  
日本映画学校にて、公開シンポジュームの開催  
イベント名：【シネリテラシー・映画教育の未来】  
上映作品：社会教育映画「映画をつくる子どもたち」

## 報告の要約【平和をめざす映像教育のとりくみ】

### プロジェクトの目的

近年、「平和」「人権擁護」「生命の尊厳」など心の教育の大切さが叫ばれている。しかし、青少年に向けて具体的な方法を提示しない限り、若い子ども達に健全な心が〈身につく〉とは思えない。

そこで、映像による教育すなわち【シネリテラシー】への取り組みが緊急課題になって来た。

《日本の中で》いま、日本の教育現場では深刻な問題を多く抱えている。学習意欲の低下、不登校やイジメの問題、さらには増加する外国人労働者子弟の教育問題など。

学校で、子どもたちは学ぶことの面白さを実感出来ているのか。移民の子ども達が多いオーストラリアの教育現場もまた多くの問題を抱えて、教育者は解決策を真剣に模索して来た。

### 活動の内容と方法

《オーストラリアの挑戦》今回とりあげる「シネリテラシー」の実践は、ニューサウスウェールズ(NSW)洲の教育省が2001年はじめた実験的な教育である。社会教育映画【シネリテラシー・映画をつくる子どもたち】(60分)の製作と展開。映画を初等・中等教育の現場に本格的に取り込み、『映像を深く読み、書く過程=映画の製作』を通して、子ども達に楽しい体験学習をさせながら豊かな教育成果をもたらしている。共同作業を通しての人間教育、コミュニケーションの育成や学習意欲の向上を引き出す。

### 活動の実施経過と課題

最近では、日本でもシネマスクールやワークショップとして青少年対象の映画製作が始まっているが、教育現場での展開は今後の課題であり、その貴重な参考となるものである。特にユニセフの掲げる青少年の健全な育成に合致するこの新しい映画教育は、先駆的な教育実践である。

この実践は、単に日本だけの参考というだけでなく、21世紀を迎えてますますグローバル化に向う世界にとって国際理解と平和の構築に役立てるものと確信するものである。

## 贈呈作品及び添付資料

- 1) 完成映像 DVD 『シネリテラシー・映画をつくる子どもたち=オーストラリアの挑戦=』 (2007 年 5 月完成)
- 2) 完成特別試写会の案内 (2006 年豪日交流年 11 月 14 日) 及び映画チラシ
- 3) 関連記事 キネマ旬報、月刊誌「スコーレ」
- 4) 2007 年 5 月 26 日・映画上映と公開シンポジューム  
「シネリテラシー・映画教育の未来」配布資料
- 5) 同上のパンフレット (KAWASAKI しんゆり映画祭) 及び映画チラシ
  - 1) 同上の関連記事 (3 紙) とユニ通信
  - 2) 開発教育全国研修会 (07 年 8 月 5 日)
  - 3) SIGNS ASIA (シグニス・アジア大会) パンフレット (9 月 28 日上映会)
- 9) 日本映画学校・作品選 (2007 年 8 月 関連記事)
- 10) その他、全国で展開が始まった日本版「シネリテラシー」の関連記事

CINELITERACY

映画をつくる  
子どもたち

＝＝オーストラリアの挑戦＝＝

脚本・監督 千葉茂樹

企画 製作  
市民グループ地球家族の会

共同製作  
映像教育学研究会（日本映画学校）  
日本映画映像文化振興センター

## 【映画は世界市民へのパスポート】

Jean mills

ポートレート

オーストラリアの教育現場で  
新らしく始まった挑戦  
映画(シネマ)を論理的に読み解き、  
映画(シネマ)を創る  
シネリテラシー  
さまざまな国と文化  
多民族社会のなかでの教育  
多民族社会のなかでの共生  
仲間と共にひとつのものを  
創りあげる喜び  
映画製作を用いて  
人格をつくる教育メソッド

ジェーン・ミルス講師  
2001 年以来、オーストラ  
リア NSW 州を中心に  
映画の授業・シネリテラ  
シーを研究開発してきた  
専門家。  
イギリス国営放送 BBC  
放送プロデウサー、デレ  
クターの経験を経て、  
2000年までオースト  
ラリア国立映画大学で映  
画学科長を歴任、若い映  
画人を育成する一方映画  
評論家、国際映画祭の審  
査員として活躍している学習意欲を高め

それは子どもたちの  
自信と未来への希望となる

## 【シネリテラシーへの道標】

千葉茂樹

\* 日本の中で

いま、日本の教育現場では深刻な問題を多く抱えています。学習意欲の低下、不登校やイジメの問題、さらには増加する外国人労働者子弟の教育問題など。

学校で、子どもたちは学ぶことの面白さを実感できているのでしょうか。

移民の子ども達が多いオーストラリアの教育現場もまた多くの問題を抱えて、教育者は解決策を真剣に模索してきました。その中心人物が映画教育専門家ジェーン・ミルス女史で、映画が果たす文化的な使命について熱く語っています。

\* オーストラリアの挑戦

今回とりあげる「シネリテラシー」の実践は、ニューサウスウェールズ州(NSW)の教育省が 2001 年にはじめた実験的な教育です。しかも年ごとに目覚ましい成果が評価されています。

映画を初等・中等教育の現場に本格的に取り込み、映像を深く読み・書く課程＝短編映画の製作を通して、子供たちに楽しい体験学習をさせながら創造的な教育成果をもたらしています。単に学力の向上に留まらず、共同作業を通しての人間教育、コミュニケーションの育成や学習意欲の向上を引き出していました。子どもたちの表情は、見違えるように変化していきます。

\* 未来に向けて

最近では、日本でもシネマスクールやジュニア・ワークショップとして青少年対象の映画製作が始まっていますが、教育現場での展開はこれからの課題であり、その貴重な参考となるものです。

とくにユニセフの掲げる青少年の健全な育成にも合致するこの新たな映画教育は世界を平和に導くものと確信するものです。

他にも企業などの人材養成や市民講座のなかでも、映画教育・シネリテラシーが果たす役割が期待されると思います。

この実践は、単に日本だけの参考というだけでなく、21世紀を迎えてますますグローバル化に向かう世界にとって国際理解と平和の構築に役立てるものと確信しています。

## 【どんな映画の内容なのですか】

### Chapter 1) プロローグ・撮影現場

「本番です。静かにして下さい。」  
ここは子供たち(小学生 中学生)の真剣な映画作りの現場—  
オーストラリアのシドニー郊外を舞台に展開されるシネリテラシー  
の実践模様がフラッシュされます。

ところでオーストラリアは、21世紀の世界を象徴する国家だと言われています。世界の200以上の国と地域から移民を迎え入れたオーストラリアでは、様々な民族が共存、共生しているからです。その国の教育現場で、近年あたらしい取り組みが始まっています。

スナップ (1)  
オーストラリアの国旗

クレジット・タイトル  
『シネリテラシー・  
映画をつくる子供たち』

### Chapter 2) 教師たちの研修プログラム(前期1日目)

2005年6月、NSW教育省が主催するシネリテラシー(映画教育)の研修会が実施されました。その指導に当たるのはジェーン・ミルズ講師。

スナップ (2)  
ジェーン先生 白板の前  
で話す

研修会の参加者は小中高校の教師達 28 名。主に国語や美術、音楽などの教師達です。なかには学習欲の低い子供たちに直面して、悩みを抱えた教師も少なくありません。ジェーン先生は話します。「シネリテラシーは、映画を読み解く、そして書く(制作)プロセスを通して子どもの学習意欲を高めること、目的は教育なのです」先ず初日に取り組んだことは、参考の映画を用いてストーリーが意味していることを読み解くこと《Reading the Screen、》映画言語や文法などを学ぶことが前提となります。その手助けとしてジェーン先生は独自の分析表を配付しました。映画を読み解く方法が「5つの要素」からなりたっています。

映画分析:5つの要素

美術 セットデザイン、室内装飾など  
撮影 アングル、サイズ 移動など  
俳優 人種 時代、演技 動き、  
音声 台詞、効果、音楽ほか  
編集 カッティング／モンタージュ他

: 他に、Mise-en-scene 画面の中の構成／構図に注目する。

Diegetic 登場人物が聞き取る音  
Non-Diegetic 観客のみが聞き取る音  
などに配慮する。

Chapter 3) 研修会2日目

翌日、研修会前期のまとめとして、ジェーン先生は参加者が各学校で半年間に取り組むシネリテラシーの実践計画の作成をさせました。そして、共通のテーマには「多文化主義」を提案したのです。

NSW の教育局で、「シネリテラシー」を積極的にすすめて来た担当者は、その経過と苦労ぶりを語ります。

スナップ 3)  
教育局ミシェル女史

#### Chapter 4) 学校現場でのシネリテラシー(前期)

研修会に参加した教師の中から3つの学校を選んで取材が進められます。

=前期では映画の読み方・解読が中心です。

\* ホームブッシュ公立小学校のスタート

シドニーの中心部から南西へ 約20キロ、この地域はインド、スリランカからの移民が多く住んでいます。

校門には「シネリテラシー実施校」の看板が掲げられ、地域全体の取り組みが始まっていました。

スナップ 4)  
クリス校長

校長のクリス先生は言います。「この学校に通うインド系の子供たちは理数科系が強いのです。その一方で芸術性や創造性に乏しい傾向があるのでシネリテラシーを取り入れました。」

\* 5年担任のウェンディー先生のクラスは25名。

彼らはまず短いコメディ映画を見て話し合い、映画用語を書きだして、その内容や仕事を理解することから始めました。皆んな興奮ぎみです。

#### Chapter 5) ブラックセル小学校のスタート

この地域の特長はアジア、アフリカそして先住民アボリジニが多く住む

土地柄です。

親の識字率が低く、教育の場としての学校への認識が乏しい親も多いのです。従って、3つの学校の中では難問を抱えた一つと言えますが、それだけに、保護者たちが学校に寄せる期待が大きい一面もあります。ここでは、5年生と6年生を受け持つ、二人の女性の教師スリーとバネッサ両先生による合同実習を取りあげていきます。

#### Chapter 6) フェアフィールド公立高校のスタート

この地域は中東系の移民が多い新興地です。

ハイスクールとはいっても日本の中学・高校が一貫で生徒数は約千人。美術担任のキャサリン先生は選択科目のクラス(22人)でシネリテラシーに取り組みました。住宅環境もあって、子どもたちの学習能力や意欲も決して高くないと担任は言います。

キャサリン先生はまず、西部劇のワンシーンを使って画面の構成について話し合います。

生徒は途端に目を輝やかせて発言します。

#### 【映画づくりから学ぶものは何ですか】

#### Chapter 7) 教師たちの研修プログラム(後期3日目)

前期の研修から1ヶ月後の7月—

後期2日間の研修会は、撮影やPC編集設備が整った公立高校で行われた。参加者は3組の製作プロダクションに立ち上げて《Writing the Screen》映画をつくる=それぞれに3分の短編映画を製作する手順を実習します。

しかし、その課程でジェーン先生は確認します。

“シネリテラシーのポイントは、映画製作が狙いでないということ。

トレーニングでもありません。むしろ教育なのです。その教育の目的  
は子供たちの興味(エンゲージメント)を強めること、そして彼らのリ  
テラシー能力に刺激を与えることなのです。”

#### Chapter 8) 教師たちの 研修プログラム(後期 4 日目)

最終日、教師たちの短編映画つくりは、大車輪で進められました。  
そのひとつのグループ「大道芸人」というタイトルの短編つくりを例に、  
参加者たちの興奮ぶりを描きます。  
他の 2 つのグループ製作と発表を含め、一ヶ月にわたる研修と実践を可  
能にしているのは、参加した教師たちの熱意とカメラ、パソコンを含む、  
新機材の導入と言えるのです。

スナップ 5)  
「大道芸人」の撮影風景

#### Chapter 9) 学校現場のシナリテラシー(後期)

再び、3つの学校で進められる《Writing the Screen》=映画作りを  
追跡します。

##### \* ブラックセル小学校の準備

9月に入るとベネッサ先生のクラスは、シナリオ作りを始めていまし  
ていました。この課程は文章力向上を目指すことです。  
ストーリーはアジアからの転校生を受け入れたクラスの出来事  
《Long way home》です。

\* 一方スーザー先生のクラスは、そのシナリオをもとに、スタッフ編  
成を終えてリハーサルを始めています。監督は、アボリジニの少女。  
カメラマンは中国系の男子。まさに国際色豊かです。  
撮影は 9 月.10 月の約 2 ル月間を使って、毎週さまざまな授業をアレ

ンジして進められるのです。

[

#### Chapter 10) ホームズ・小学校の撮影

ウェンディ先生のクラスではセット撮影が始まっていました。

いたずら好きの少女の一人が、本の中に吸い込まれて不思議な世界を体験するというストーリー=いかにも子供らしいアイディアに、クラス全員が現代っ子らしい工夫を凝らして取り組みます。、

タイトルは「Class of 2005」

スナップ 6)

インドの少女の活躍

#### Chapter 11) ブラックセル小学校の撮影

合同授業で取り組んだチームは、2班に別れてひとつの作品を製作しようというのです。何よりもコミュニケーションの大切さと監督のリーダーシップ、そして各自の責任感が問われました。

スナップ 7)  
アボリイジにニの少女の監督

スナップ 8)  
中国系の男子が監督する

## Chapter 12) フェアフィールド高校の撮影

キャサリン先生と撮影スタッフは地元のショッピングセンターで  
ロケをすすめっていました。

監督には授業中の態度は悪いがボス的な少年が選ばされました。  
カメラマンもアラブ系の少年で、キャサリン先生にとっては  
冒険でした。

映画の内容は中国系の少女たち 3 人が考えたラブストーリー。

美しい一人の少女を愛しあう男子二人が  
ボクシングで対決する「Million dollar girl」。

クライマックスはボクシングシーン。その舞台には、プロデューサー  
の努力で地元警察のジムに協力して貰いました。

プロデューサーを担当した生徒の母親が語っています。

“この映画作りを通して、息子がとても変り始めました。大学に進学  
したいと言っています。いい授業に出会いで喜んでいます”



## Chapter 13) フェアフィールド高校の編集

これらの映画づくりには、地域社会や住民たちの協力が不可欠です。  
シネリテラシーは学校、家庭、地域の連携によって従来にない成果

をあげることになるのです。

生徒たちの編集作業は続きます。この段階になるとキャサリン先生は生徒の指導をもっとも大切にします。ひとり一人の長所や能力を正しく評価し、生徒に自信を与えるのです。自分たちの撮影した画面を前に、生徒たちは真剣です。そして、その表情には大きな変化がみられます。

スナップ 10)  
編集中のキャサリン先生と生徒たち

#### Chapter 14) 劇場での公開 ぼくたちのワールドプレミア

\* 12月初旬、いよいよ映画上映会の開催です。

地元、キャンベルタウンの映画館が2日間協力して、午前中の会場を子供たちのために提供しました。

第1日目は、小学校の部、4校の作品上映。

ホームブッシュ小学校、ブラックセル小学校の子供らがバスに乗って映画館に到着します。会場に用意された赤いジュータン。

教師も子供らもみな、盛装して、喜びにあふれています。

クリス校長は言います「見て下さい。子供たちの表情は自信に満ちています」

ジェーン先生や各学校の関係者、保護者達の参加が会場の雰囲気をもりたてます。

作品の上映が始まりました。子供たちは大きなスクリーンに映し出される自分たちの映画に、目を輝かせ喜びにあふれています。

\* 二日目には、高校生らが6本の作品をもって登場しました、フェアフィールド高校のみんなも盛装。キャサリン先生も一段と派手なドレス。

彼らの力作「Million dollar girl」

この半年間で子供たちはそれぞれが大きな変化をみせています。

ジェーン先生は語っています。

“今回の10校全ての映画に多文化主義が入っていました。生徒たちは多文化というものを何らかの形で学び取ったと思います。それぞれの映画作りの課程で様々な角度から、このテーマを扱ったのです。それはとても重要な事です。映画はたんに娯楽や喜びを与えるだけでなく、私たちのコミュニティと社会を反映しています。ですから、今後のシネリテラシープロジェクトの中に多文化主義を位置付ける事はとても大切な事だと思っています。”

\*この日、参加した子供ばかりではなく、教師も、保護者たちの表情も子供らの手作りの映画に会えた喜びであふれています。ここでは映画が文化として、高く評価されていること。そこには、人間の質的な向上に大きく貢献する可能性を秘めていることを証明しているといえるのです。民族や国籍が違っても、どの子も大きな可能性があります。それを存分に花開かせる文化的資源、その一つがシネリテラシーダと言えるのです。

スナップ・上映会

メディアリテラシー

「メディアリテラシーには、三つの C が必要である」と考える。  
Culture (文化的な教養), Criticism (批評的な視点), creativity (創造性)  
この三つの C がそろわなければ学校教育は成立しません。

Cary Bazalgette

### 《制作スタッフ》

企画／製作 小島好美  
製作補／通訳 金森マユ  
監督 千葉茂樹  
撮影 Tony Wilson  
録音 Reo Julian  
音楽 山崎宏

### 《出演及び協力》

Jean Mills  
Michele Shepherd  
NSW 州教職員の皆さん  
NSW 州の公立小学校  
高等学校の皆さん

### 特別協力

オーストラリア NSW 洲  
教育局  
(ナレーター)  
藤 真秀

### 助監督

編集／翻訳 千葉くらら  
技術協力 浜口文幸  
美術デザイン 幻夢

### 《助成》

サントリー文化財団  
庭野平和財団

### 《協賛》

映画「愛の鉄道」製作委員会  
童夢映画プロジェクト

問い合わせ先：市民グループ地球家族の会 E-mail  
DVD 販売価格＝

## 【DVD 構成・目次】

### 1) チャプター分類表

- Chapter 1 プロローグ・シネリテラシーの現場
- Chapter 2 研修会1日目(前期)
- Chapter 3 研修会 2 日目(前期)
- Chapter 4 ホームブッシュ小学校でのスタート
- Chapter 5 ブラックセル小学校でのスタート
- Chapter 6 フェアフィールド高校でのスタート
- Chapter 7 研修会 3 日目(後期)
- Chapter 8 研修会 最終日(後期)
- Chapter 9 ブラックセル小学校の準備
- Chapter10 ホームブッシュ小学校 クランク・イン
- Chapter11 ブラックセル小学校 クランク・イン
- Chapter12 フェアフィールド高校 クランク・イン
- Chapter13 フェアフィールド高校 ポスト・編集作業
- Chapter14 私たちのワールド・プレミア

### 2) 特典映像

- a) 関係者インタビュー
- b) 生徒たちの作品集

## 【特典映像】

### A 関係者インタビュー 4つの柱

- 1)事前研修 受講した2人の教師が証言する。  
前半(シネリテラシーの特色)と後半  
シネリテラシーと人間性の育成)
- 2)実践 ジェーン先生からの教師たちへのア  
ドバイス  
(生徒たちの役割決定)  
(学習意欲の向上とシネリテラシー)
- 3)成長 家族(姉)の証言  
9年生(中学3年)の弟の変化と成  
長ぶり  
ジェーン先生が語る成長の実例(教  
師と子どもの役割の発見)
- 4)目的と今後 NSW 州教育局スタッフが、目的と今後  
について語る。  
ジェーン先生の証言(シネリテラシー  
の可能性、社会への貢献)

### B 生徒たちの作品集

- 1) ブラックセルストリート公立小学校 5・6 年生  
「A Long Way Home」  
“ベトナムからの転校生(女子生徒)と世話役を頼まれた少年との  
サスペンスコメディー”
- 2 ホームブッシュ公立小学校学校 5 年生

「A Class of 2005」

“ いたずら好きで居残り組の子どもが、読書を命じられる。主な子どもが次々  
その本の中にすいこまれるという SF 仕立ての意欲作”

3 フェアフィールド公立高校学校 9 年生

「Million Dollar Girl」

“一人の美少女を取り会う2人の男子生徒のライバル劇。  
お金を賭けたボクシング試合で展開する意外の結末—“

4) コンコルド公立高校 9 年生

「TOAST」

“トーストの焼き上がりは、色合いもさまざま。  
同じように、生徒たちの人種、肌色も 10 人 10 色—多文化、多民族の共生  
を描いたスケッチ風な作品“

注釈)オーストラリアの学校では、1 年生から 10 年生までが義務教育。

新学期は、2 月から始まります。